

vivo

水戸芸術館音楽紙[ヴィーヴォ] vol.257

8-9

August & September 2023



新専属楽団始動!

特集

02

- 02 新専属楽団「カルテットAT水戸 第1回演奏会」川崎洋介(ヴァイオリン)インタビュー
- 06 水戸市民会館開館記念事業 サイトウ・キネン・オーケストラ ブラス・アンサンブル
- 08 中田喜直の"うた"の世界～生誕100年に寄せて～
- 10 庄司紗矢香(ヴァイオリン)、ベンジャミン・グローヴナー(ピアノ)、
モディリアーニ弦楽四重奏団
- 12 INFORMATON

水戸芸術館新専属楽団「カルテット^{アット} AT 水戸」、この夏始動!

文・聞き手: 鴻巣俊博



今年8月6日、「水戸室内管弦楽団(MCO)」「新ダヴィッド同盟」に続く新たな専属楽団「カルテット^{アット} AT 水戸」が活動を開始します。小澤征爾館長が絶大な信頼を寄せるMCOメンバーの川崎洋介さんの呼びかけで集まった、西野ゆかさん、柳瀬省太さん、辻本玲さんによる弦楽四重奏団です。彼らは10年間、佐世保のアルカスホールで「アルカス・クアルテット」として活動を続けてきた4人。この夏からは水戸芸術館で年に1回、およそ1週間の入念なりハーサルを経て演奏会を開きます。

リハーサル期間中には近隣の福祉施設へアウトリーチに出向いたり、子どもたちへの指導を行ったりと地域との繋がり作りを目指すこのカルテット。演奏会でも曲目に関するトークを交え、室内楽をより身近に感じていただけることを標榜しています。ちなみにこの「カルテット^{アット} AT 水戸」というネーミング、英語表記では「Quartet AT Mito」となり、水戸芸術館の英語名「Art Tower Mito」の略称「ATM」が隠れているという仕掛け。川崎さんを中心に、メンバーの皆さんが考えてくれました。

この4人はMCO、そして松本のサイトウ・キネン・オーケストラでも出演を重ねているみなさんです。ここでメンバーを簡単にご紹介します。

第1ヴァイオリンの川崎洋介さんはニューヨークで生まれ育ち、ジュリアード音楽院を卒業。1999年4月、21歳の時にMCOに初参加し、2002年よりメンバーとなりました。MCOは曲ごとにコンサートマスターが変わるのが特徴の1つ。川崎さんは今まで何度もコンマスを担当し、指揮者なしの演奏でも精鋭メンバーたちをリードしてきました。現在はカナダのオタワに居を構え、オタワ・ナショナル・アーツセンター管弦楽団のコンサートマスターも務めています。

西野ゆかさんは、桐朋学園大学在学中に結成した弦楽四重奏団「クアルテット・エクセルシオ」の第1ヴァイオリン奏者としてご存じの方も多いと思います。イタリアのパオロ・ボルチアーニ国際弦楽四重奏コンクールで最高位を受賞するなど、国内外で数々の受賞歴を誇る「エクセルシオ」をリードしてきた西野さん、「カルテット^{アット} AT 水戸」では第2ヴァイオリンとしてアンサンブルの要を担います。MCO

には2008年に初登場、今年5月の第111回定期演奏会(指揮: デイエゴ・マテウス、ピアノ: マルタ・アルゲリッチ)にもゲスト奏者としてご出演いただきました。

柳瀬省太さんは日本とイタリアで学び、ドイツのシュトゥットガルト州立歌劇場管弦楽団に入団、現在は読売日本交響楽団ソロ・ヴィオラ奏者を務めているという、ヨーロッパ仕込みのヴィオラ奏者。MCOへの初登場は川崎さんよりも早い1997年で、その後もゲスト奏者として幾度も出演、「ストリング・クアルテットARCO」をはじめとする室内楽でも目覚ましい活躍を見せています。

チェロの辻本玲さんは子供時代をアメリカで過ごし、東京藝術大学を首席で卒業後フィンランドとスイスに留学、国内外のコンクールで数々の賞を受賞してきました。ソリストとしてはもちろん、近年はアンサンブルやオーケストラでの活動にも力を入れ、2020年にNHK交響楽団の首席チェロ奏者に就任しました。MCOには2011年に初登場、これまで10回以上MCOチェロパートで朗々とした響きを聴かせています。

川崎洋介(ヴァイオリン)インタビュー



普段はカナダのオタワにお住まいの川崎洋介さん。NHK交響楽団の定期演奏会にゲストコンサートマスターとして出演するために来日されていた川崎さんにインタビューを行いました。

—お父様の川崎雅夫さん(水戸室内管弦楽団[MCO]ヴィオラ奏者)に初めてヴァイオリンを習ったと伺いましたが、ヴァイオリンを始めたときのことを聞かせてください。

ヴァイオリンを始めたのは遅い方で6歳のとき。その頃のことはあまり記憶にはないのだけど…。父に習い始めて、1年ぐらい経ってから7歳から10歳の間、五嶋みどりさんのお母様の五嶋節さんに習い始めました。初めて出された課題がたしか、ラロのスペイン交響曲という難易度の高い曲で、うちの親もすごいびっくりしたという話を聞いたんだよね。ちゃんと弾けてたかどうかは別の話ですが(笑)。覚えているのはレッスンを受けていたニューヨークのアパートの部屋。隣の部屋ではみどりさんがパガニーニのカプリースを弾いているのが聴こえてきたことは記憶にあります。

—現在川崎さんはMCOのメンバー、そしてオタワ・ナショナル・アーツ・センター管弦楽団のコンサートマスターを務める傍ら、水戸でも公演した「トリオ・インク」など室内楽の活動も活発に行っています。演奏する立場から見て、オーケストラと室内楽の違いはどのようなものでしょうか。

個人的な準備や、自分で音楽的なスタンダードを持つことなどは共通する部分だけど、室内楽では各演奏家のベースにある個性を生かして創り上げるというところが一番オーケストラと違う所でしょうか。オケは、主にブレンドとか、バランスの取り方とか、全体的な視点を気にしながらリハーサルを進めます。カルテットでも同じことをするけれど、もっとミクロな視点が必要。顕微鏡みたいにズームするようなイメージかな。

オタワのオケは60～65人ぐらいなので中規模、MCOはさらに小編成で30人程度ですよね。だけど基本的にやるべきことはそんなに違いはない。この度NHK交響楽団のゲストコンサートマスターを初めて務めるのですが、そんな大編成オケのコンマスはほ

とんどやったことがない。オタワやMCOとは感覚が違うと思いますよ。車でいえば、大きなアメ車を運転しているような感覚。ハンドルを切っても全体に伝わるまですこし時間がかかる。それと比べると、カルテットなどの室内楽はディテールを突き詰めていくことがメインだから、それがオケと室内楽の大きな違いですね。

—「カルテット AT 水戸」のメンバーについて聞かせてください。

このメンバーでは10年間、佐世保でアルカス・カルテットとして活動を続けてきたのですが、実はこのカルテットを結成するきっかけを生んだ地は水戸だったんです。僕がMCOで水戸に来ているとき、佐世保のホールの方が水戸に来てくださってこのカルテット結成の話を持ち掛けてくれたんです。あれは京成ホテルのレストランで、僕はケーキを食べながらその話を聞いてたなあ(笑)。

カルテットを結成するにあたり、最初に声をかけたのが玲ちゃん(辻本さん)でした。奥志賀の室内楽アカデミーで僕が講師をしているとき、渡辺實和子さんが受け持ったカルテットの受講生だった彼の演奏を初めて聴いたんです。ベートーヴェンの弦楽四重奏曲 作品127を演奏していたと思います。すごく自分と音楽的な感覚が似ているな、と感じて、その頃から彼と演奏してみたいと思うようになりました。もう20年ぐらい前のことになるね。省ちゃん(柳瀬さん)とゆかちゃん(西野さん)は松本のサイトウ・キネン・オーケストラで友達になった2人。僕はストリング・クワルテットARCO(伊藤亮太郎さん、双紙正哉さん、柳瀬省太さん、古川展生さん)のみんなと仲

が良くて、そのつながりもあって省ちゃんにヴィオラをお願いしました。ゆかちゃんはクアルテット・エクセルシオの第1ヴァイオリンで活躍してるし、カルテットを深く知っているこの2人と演奏したいなあ、と思って声をかけました。みんな音楽的にも人間的にもよく合う友達なので、お仕事で演奏しているっていう感覚はない。一緒に演奏していると本当に楽しいんです。

—このカルテットは、演奏会の時にトークを入れてお客様との距離を縮めること、そして毎回あまり知られていない作曲家の作品をプログラムに入れることを標榜しています。今回はポール・ウィアンコ(1980-)という作曲家の〈弁慶の立ち往生〉がプログラミングされました。この選曲に至った経緯をおしえてください。

日本ではあまりないのかもしれないけど、アメリカやカナダではトークを入れるスタイルは当たり前になっています。水戸でもそれをやりたいのです。

僕がポール・ウィアンコの作品を初めて演奏したのは、オタワのオケのメンバーとの室内楽演奏会の時。パンデミックの間だったんだけど、その期間ブラック・ライヴズ・マターの運動も広く知られるようになって、プログラミングの多様性が注目され始めた時期でした。その演奏会では黒人の作曲家アドルフ・アス・ヘイルストーク(1941-)の作品で、黒人霊歌〈Swing Low, Sweet Chariot〉のテーマが変奏されていく弦楽四重奏曲を取り上げました。それと合わせてドヴォルザークの〈アメリカ〉を。ドヴォルザークはアメリカに来て黒人霊歌に興味をもって、ペンタトニックスケール(五音音階)を使い始めるようになったわけですね。もう1曲、若いアメリカ人作曲家の曲を、

という時にポール・ウィアンコの〈リフト〉という作品に出会いました。これがすごく音楽的に面白い曲だったんです。全体として、アメリカの歴史を俯瞰するようなプログラムになりました。

僕はポールとは面識はないのだけど、姉のミチ・ウィアンコさんとはジュリアード音楽院のヴァイオリンの同期だった。今も演奏や作曲などクリエイティブな活躍をしている人です。なのでウィアンコと聞いて、「知っている名前だ」と思いました。作曲家ってどこかからインスピレーションを得て曲を作るわけですね。彼はアメリカで生まれ育ったけど、母親が日本人ということもあって日本のカルチャーに興味があるはずだと思う。自分にどのようなルーツがあるかというのは誰でも気になりますよね。そのようなところから生まれてきたであろう〈弁慶の立ち往生〉という曲はとても興味深い。

自分が経験して良かったことはみんなにも経験してほしい、って誰でも思うことじゃないですか。例えば「この映画は面白かったから見てみて」とか、「あのレストランの料理は美味しかったから今度一緒に行こうよ」とか。それと同じように、これまで僕が演奏してきた「良い」と思ったコンテンポラリーの作品をたくさんの人に知ってもらいたいという気持ちがあるし、今を生きる作曲家の作品を広めるということにも意味があるんじゃないかなと思っています。日本ではアメリカに比べて演奏会のプログラミングに多様性を求めるという動きはあまりないと思いますが、「カルテット AT 水戸」の演奏会は僕が経験してきたことを皆さんとシェアできる場になるといいなと思っています。

—〈弁慶の立ち往生〉というタイトルなので、日本的な音階が使われているのではないかと思いましたが、実際聴

いてみるとまったくそうではなく、弦楽器の特殊奏法を使ってこのストーリーを国籍にとらわれずニュートラルに描写しようとしているように感じます。

弦を指ではじくピチカートがとても多い。そして、楽譜を見てみるときっちり合わせるどころばかりではなく、各奏者の演奏にゆだねられている部分があるんです。ピチカートといえば、作曲家によってピチカートの扱い方が全然違うのが面白い。例えばラヴェルの弦楽四重奏でピチカートばかりの楽章があって、これはピチカートだけで音楽を作るという例ですね。一方、ピチカートをサウンドエフェクトとして使う人もいます。有名なヴィヴァルディ《四季》の〈冬〉第2楽章は、暖炉で薪がパチパチと燃える描写として登場します。これはピチカートの音もちゃんとハモってますが、ウィアンコのピチカートは全く違う。矢が飛んでくる音やそのほかいろいろな描写に使われているんですね。彼の曲は、突然ポップス系のビートが出てきたりして、僕たちと同じ“今”を生きている人が書いた作品なのだと感じます。

今回最初に演奏するモーツァルトは、ゆかちゃんからの強い希望があって選曲しました。後期の弦楽四重奏の中で他の作品はこのメンバーで演奏しましたが、〈プロシヤ王〉はまだやったことがないし、他でもそんなに頻繁に演奏される曲ではないですね。明るい曲調でオープニングにふさわしい1曲だと思います。

—後半のシューベルト〈死と乙女〉は弦楽四重奏の傑作中の傑作ですね。

このメンバーで一度演奏したことがあって、その時はこの作品のもとになった歌曲の詩の朗読の後に演奏し



1999年4月、川崎洋介さんが初めて水戸室内管弦楽団に出演した第38回定期演奏会（最後列の左から3番目が川崎さん）。

ました。水戸でも、そのように作品を深く味わえるような仕掛けができればいいなと思っています。

この曲ではいろいろな経験をしました。すごい迫力のある曲だし、学生の時にきちんと勉強したので思い出があります。ジュリアード弦楽四重奏団の第1ヴァイオリン奏者だったロバート・マン先生のマスタークラスで、他の学生がこの曲を演奏するのを聴講した時のことはよく覚えています。テーマと変奏の楽章のことを説明するとき、4つのパートを人間の体の各部分に喩えて説明していました。第1ヴァイオリンは心臓、第2ヴァイオリンは神経組織、ヴィオラは魂…といったような具合。人間の身体がいろいろな独立した器官を持ちながら、1つの身体を形作っているのと同じように、この部分はひとりひとりが別のキャラクターとして独立しながらも1つの音楽を作るということを伝えるための喩えだったんですね。

MCOでも録音がありますが、マーラーが編曲したオーケストラ版にも個人的な思い出があります。アメリカのアスペン音楽祭で、指揮者のデイヴィッド・ジンマンが音楽監督に就任した1998年のオーケストラコンサート

でのこと、前半はモーツァルトの協奏交響曲、後半が《死と乙女》というプログラムでした。協奏交響曲は、ヴァイオリンのチョーリヤン・リンとガアルネリ弦楽四重奏団のヴィオラ奏者マイケル・トゥリーがソリストだったんです。僕はガアルネリ弦楽四重奏団のファンで、「わあー、マイケル・トゥリーが弾くんだー!」とすごく楽しみにしてたんですよ。それで前半が終わって休憩時間、オケの仲間たちと「トゥリーと《死と乙女》を一緒に弾いたら最高なのよね」と雑談していました。なにしろカルテットのエキスパートですからね。いよいよ後半が始まる、というとき、僕たちオーケストラはステージ上で指揮者の登場を待っているわけですが、ステージ袖の扉が開いたら出てきたのは指揮者ではなくステージマネージャー。譜面台と椅子をもって出てきた彼の後ろにゆっくりとトゥリーが歩いて出てきて、ヴィオラの一番後ろの席で一緒に弾いてくれたんです!「トゥリーと一緒に《死と乙女》を弾けるんだ!」と、オケメンバーと大いに盛り上がり、僕の今までの演奏会の中でもトップ5に入るほど思い出深いものとなりました。それはやはりこの曲の持つ強烈な個性

も相まって、ということです。

——記念すべき第1回演奏会、とても楽しいなプログラムです!最後に水戸の皆さんにメッセージをお願いします。

僕にとって水戸で演奏することは、ホームカミング(帰郷)のように感じています。日本で初めて演奏の仕事をお願いしたのはMCOで、それ以来日本で演奏する機会が増えて感謝しています。今はカナダの仕事も忙しくて以前ほどは参加できてないですが、昔はほぼ毎回出演させてもらっていました。偶然にも祖父母は水戸の近く、常陸太田の人だというルーツもあるし、MCOで僕の若い頃から見守り続けてくれているお客さんが水戸にいると思うと、本当にホームカミング。MCOだけではなく「トリオ・プラス」「トリオ・インク」などの室内楽で、水戸の中学生のみんなに演奏を聴いてもらう機会もありました。そんなホームのような水戸で、専属のカルテットとして活動できるのは本当に嬉しいです。カルテットは演奏者の人数が少ない分、お客さんとの距離も近い。これからも水戸芸術館に集う皆さんと継続して濃いコミュニケーションをとれたらいいな、と思っています。

(2023年6月6日、zoomでのインタビュー)

■公演情報

水戸芸術館 新専属楽団 カルテット AT 水戸 第1回演奏会

2023.8.6(日)14:00
全席指定 一般¥4,500、
U-25(25歳以下)¥1,500

●曲目

モーツァルト:弦楽四重奏曲 第21番 二長調
K.575(プロシャ王 第1番)
ウィアンコ:弁慶の立ち往生
シューベルト:弦楽四重奏曲 第14番 二短調
D810(死と乙女)

新オープンの水戸市民会館で、SKOブラスを聴く。

文・聞き手:中村 晃



新しい水戸市民会館が7月2日に開館しました。市役所の隣にあった旧水戸市民会館から移されて、南側は国道50号に面して、北側は水戸芸術館に隣接して建設されました。国道50号を挟んだ向かい側には京成百貨店があり、市民会館とは上空通路(横断歩道橋)で結ばれています。そして、水戸市民会館がこの場所に移設されたことで、水戸市民会館と水戸芸術館と京成百貨店とが連携して、「MitoriO(ミトリオ)」という愛称の下、街の賑わいを創出する文化ゾーンとして期待がかけられています。

水戸芸術館は、その名が示す通り、西洋を中心に数百年にわたって育ててきた「芸術」の音楽、演劇、美術作品の

紹介と新しい創造を活動の基盤としています。一方の水戸市民会館は、芸術に限らない、さまざまな「文化」活動の場として機能することになると思います。たとえば、音楽の分野で言えば、水戸芸術館は西洋芸術音楽、いわゆるクラシック音楽を主な対象とするのに対して、水戸市民会館はポピュラー音楽を中心としながらも、あらゆる音楽をステージに迎えることになるでしょう。

地域の皆さまの一層充実した文化活動を実現するために、また「MitoriO」構想の実現のために、水戸芸術館は、これまでの30数年の活動の中で獲得してきた経験やノウハウを、水戸市民会館の運営にも役立てて、連携を図っていきたいと思います。

8月30日には、開館記念事業のひとつとして、水戸市民会館グロービスホール(大ホール)で、水戸芸術館主催の「サイトウ・キネン・オーケストラ ブラス・アンサンブル(SKOブラス)」公演を

開催します。小澤征爾水戸芸術館館長が総監督を務めるサイトウ・キネン・オーケストラが誇る豪華な金管楽器奏者たちのアンサンブルです。ベルリン・フィルやウィーン・フィルなど世界最高峰のオーケストラ奏者と日本のトップ奏者が一体になって紡ぎ上げる、神々しく華麗で輝かしい演奏で、新しい市民会館のオープニングを祝います。

プログラムの第1部は、オーケストラのブラス・セクションとしての真髓が披露されるクラシック音楽特集です。村上春樹の長編小説『1Q84』で登場するヤナーチェクの〈シンフォニエッタ〉を皮切りに、バロック初期のドイツ人作曲家プレトリウス編曲の舞曲作品、J.S. バッハが後妻アンナ・マグダレーナに贈った音楽帳の中に収められている名旋律、そしてサン＝サーンスの〈交響曲 第3番“オルガン付き”〉の終楽章という構成です。第2部は、SKOブラスの魅力が炸裂するプログラム。ピアソラの〈ブエノスアイレスのマリア〉、ガーシュウインの〈ポギーとベス〉、バーンスタインの〈ウェスト・サイド・ストーリー〉からの名曲の数々をお贈りします。

竹島悟史(打楽器奏者)インタビュー



水戸室内管弦楽団のゲスト・ティンパニ奏者として出演を重ねる竹島悟史さんは、打楽器奏者としてのキャリアに加え、ピアニスト、作編曲家としての活動も行っている才人です。そして、サイトウ・キネン・オーケストラ ブラス・アンサンブル(SKOブラス)では、欠かすことのできない演奏家として、他のメンバーから全幅の信頼を寄せられている存在です。そんな竹島さんに、SKOブラスについてお話をうかがいました。



昨年の水戸芸術館公演より

—これまでの水戸芸術館での公演で、圧巻の演奏を聴かせてくれたSKOブラスですが、アンサンブルのメンバーである竹島さんから見たこのアンサンブルの凄さをお聞かせください。

今まで、数え切れないほど多くのアンサンブルに参加させていただいてきましたが、ここまで「仲間と一緒に一つの音楽を作る」という意識に特化し、それに満ちあふれた場はそう多くありません。ここに参加する金管楽器奏者の全員が、とてつもなく高い技術力や音楽力を持ち合わせていることはもちろんですが、それを直線的に体現するのではなく、必ず仲間の音と混ぜ合わせて「そこにしか生まれないアンサンブルの音」を作り上げる。技術的に目が飛び出るほど難しいことをしていたとしても、決してそれが最前面に出ることはなく、音楽の一要素として溶け込んでいく。本番中でも、その瞬間瞬間のそれぞれのアイデアにみんなが即座に反応し、その時ならではの音が出来上がっていく。誤解を恐れずに言えば、本番という終点のためにリハーサルという準備作業で決め事を作っていくというよりは、本番でもリハーサルでも常に生き活きと音が変化していくので、いつもワクワクしています。このアンサンブルの母体であるサイトウ・キネン・オーケストラというオーケストラの特色もありますが、ここにいるメンバー全員が本当に仲良しなんです。気の良い仲間が集まって、みんなが仲間のための考えて

音を作っていったら……それはそれは、あたたかみのある愛情のこもった音楽が宿るんですね。

また、これって本当にブラス・アンサンブルの音なの?と思うくらい、とても色彩豊かで立体的な

サウンドが鳴り響くことです。それぞれの曲について熟考し、その音楽に必要な音色を、自分の楽器の音というある意味狭い概念を取り払って選んでいくので、金管楽器しかないはずなのに、まるでオーケストラを聴いているような感覚に陥ります。手品のようなですね。

そんな素敵なお夢のような音に様々なスパイスを加えるべく、舞台後方から色々な打楽器で参戦していますが、みんなの背中から音楽への想いがピンピン伝わってくるので、何も不自由を感じませんし、一緒にいられることが嬉しくてたまりません。幸せです。

—今回は、水戸市民会館の開館記念事業の一環として、2000席のグロービスホールでの公演となります。聴きどころや演奏会の楽しみ方を教えてください。

大好きな街である水戸に、また新しい文化の場が出来たことを、本当に嬉しく思いますし、羨ましさすら感じます。新しいホールで僕らの音がどう鳴り響くのか、とても楽しみにしています。

今回プログラムされている曲は生まれた時代も国も様々で、色々な音楽を少しずつたくさん味わっていただくと考えました。ブラス・アンサンブルならではの輝かしい迫力のあるサウンドはもちろん、得も言われぬやわらかい音や、はじけるような軽やかな音、哀愁の帯びた音、色々な音色をご堪能いただけたらと思います。

音楽とは、音を楽しむこと。音楽を学問として捉えてしまうと知識や理屈に縛られて何だか窮屈になるので、出来るだけ頭の中を空っぽにして心で感じていただけたら嬉しいです。また、新しいホールの新しい座席も、皆さま楽しみですよね?2時間という短い時間ではございますが、どうぞ心ゆくまでお過ごしくださいませ。

—お客さまに向けてメッセージをお願いします。

この数年で世の中の全てが激変し、音楽界もとてつもなく大きな影響を受けました。僕たちメンバーは、このアンサンブルが大好きです。好きという気持ちは、やっぱり何にも邪魔をされない素敵なもののだと痛感しています。仲間愛に満ちあふれたこのメンバーの喜びを、惜しむことなく全て音に乗せてお届けしますので、今もなお、ここに生の音楽が在るという幸せを、新しいホールという一つの空間で共有しませんか?その瞬間にみんなで笑顔になれるようしっかりと準備をして、メンバー一同心からお待ち申し上げております。

■公演情報

水戸市民会館開館記念事業／
水戸芸術館連携事業

サイトウ・キネン・オーケストラ
ブラス・アンサンブル

2023.8.30(水) 19:00

会場:水戸市民会館グロービスホール(大ホール)

全席指定 A席¥4,000、B席¥3,000、

U-25(25歳以下)¥1,000

●曲目

【第1部】

ヤナーチェク:(シンフォニエッタ)より

“ソコル・ファンファーレ”

プレトリウス:(テレシコーレ舞曲集)より

J.S.バッハ:(アンナ・マグダレーナ・バッハの

音楽帳)より “御身が共にいるならば”

BWV508(伝G.H.シュテルツェル)

サン＝サーンス:交響曲 第3番 八短調 作品78

「オルガン付き」より 終楽章

【第2部】

ピアソラ:(ブエノスアイレスのマリア)より

ガーシュウィン:(ボギーとベス)より

バーンスタイン:(ウェスト・サイド・ストーリー)より

中田喜直の“うた”の世界

～生誕100年に寄せて～

文：鴻巣俊博



中田喜直(1980年頃)

〈めだかの学校〉〈夏の思い出〉〈ちいさい秋みつけた〉など子どもから大人まで広く親しまれている童謡・唱歌や歌曲など、“うた”の作品を中心に3000近くの曲を世に送り出した中田喜直(1923-2000)。生誕100年を記念して、9月18日に中田作品を集めた演奏会を開催します。ここでは中田喜直の半生、そして珠玉の作品の誕生エピソードをご紹介します。

※文章中の太字の曲名は、今回の演奏会で取り上げる作品です。

音楽一家に生まれる

中田喜直は1923年(大正12年)、渋谷区景丘町に中田家の次男として生まれました。父は〈早春賦〉の作曲家として知られる中田章。「音楽にとって大切なのは、美しい音楽を素直に喜ぶ心だ」という想いを込めて喜直と名付けられたといいます。名前の正式な読み方は「よしただ」ですが、作曲家としては「よしなお」の名前で活動しました(ちなみに苗字は「なかだ」であり、「なかたさん」と呼ばれても返事をしなかった、というエピソードもあります)。父の章は東京音楽学校(現・東京藝術大学)でオルガンと音楽理論を教

え、兄の一次はのちに作曲家・ファゴット奏者として名を馳せる人物。そんな中田家の蓄音機からはクラシックや童謡が流れ、幼い喜直は音楽に囲まれて育ちました。この頃に触れた山田耕筰の歌曲に大きな影響を受けた、と後に回想しています。

戦時中の学生時代

8歳の時にピアノを正式に習い始め、12歳の時に見た映画「別れの曲」に感化されてショパンに心酔、喜直はピアニストを目指すようになります。1941年、東京音楽学校本科のピアノ専攻に進み、声楽科の生徒からは伴奏を頼まれることも多くなりました。同期の声楽科には水戸芸術館音楽部門元総監督の畑中良輔がおり、歌曲の作曲に関して詩の捉え方などを彼に学ぶ面が大きかったと喜直は語っています。この年の12月太平洋戦争が開戦、音楽学校の学生たちも軍需工場に駆り出されるが多くなります。1943年には徴兵され、訓練の後戦闘機の操縦士としてフィリピンに赴任します。運よく司令部勤務となり前線に送られることはありませんでしたが、彼が所属する飛行戦隊が休養のためフィリピンを離れた1か月後、米軍がレイテ島に上陸し、残っていた操縦士は全員特攻隊員として命を落としました。たった1か月の差が明暗を分ける恐ろしい戦争で、喜直は「命の大切さ」を心底感じるようになります。

作曲家としてデビュー

手が小さいためピアニストは諦め作曲家になる決意を固めた喜直は、終

戦後、夜は収入を得るため米軍のクラブでピアノ演奏、昼間は作曲に勤しむ生活を送ります。1946年、23歳の喜直は畑中とともに「新声会」の一員となります。この会は柴田南雄(吉田秀和初代館長、齋藤秀雄らと共にのちの桐朋学園大学音楽科の前身を立ち上げた音楽家)の提唱で発足し、團伊玖磨、石冢真礼生、別宮貞雄なども会員に名を連ねる若手作曲家と演奏家のグループ。喜直は新生会第3回試演会でピアノ曲〈バラード 第1番〉を発表し作曲家デビューを果たします。

1947年、第5回試演会で《六つの子供の歌》を発表。初演したのは畑中夫人でソプラノ歌手の更子こうよでした。客席で聴いていた川端康成からは「中田さんはすばらしい歌を書かれましたね」と称賛され、この後数多生み出される中田歌曲の出発点となりました。同年、畑中の初リサイタルで《海四章》初演、1949年には畑中の詩による《四季の歌》、その翌年には《マチネ・ポエティックによる四つの歌曲》が更子によって初演されたことは、畑中夫妻と喜直の音楽的な強いつながりを感じさせます。

ラジオで広まる名曲たち

芸術性の高い歌曲を生み出す一方、ラジオ放送のための作曲依頼も増えるようになります。尾瀬に咲く水芭蕉の風景を歌った〈夏の思い出〉もそんな1曲。まだまだ戦争の爪痕が残る1949年、詩人の江間章子は内幸町のNHKに呼ばれ、「荒蕪した国土に暮らす日本国民に夢と希望を与える歌を流したい」と、「ラジオ歌謡」という番組で放送する歌の作詞を依頼されます。出来上がった詞を読んだ若手ディ

レクターは「尾瀬って、何処にあるのでしょうか。今まで聞いたことがありません…」という反応。それもそのはず、当時尾瀬は学者が研究目的で訪れることはありましたが、一般の人にはほとんど知られていない土地でした。尾瀬の名が全国的に知られるようになったのは、まさにこの歌の力によるところなのです。NHK経由で江間の詞を受け取った喜直も、尾瀬には行ったことがありません(初めて訪れるのはそれから約40年後の1990年とのこと)。それでも頭の中には楽想が湧き上がり、時間をかけずに1曲できました。しかし、ピアノの前で作曲する喜直の脇から「ちょっとお粗末なんじゃあないの?」という母の声が聞こえてきます。母からの忠告は後にも先にもこの1度きり。彼はその忠告を聞き、言葉と音楽の繋がりを丁寧に見直して改作、この名曲が生まれました。「僕にとっては『母の思い出』とも言える作品」と語る喜直は、この曲の印税を母が亡くなるまで渡し続けたといえます。

作詞家のサトウハチローは1951年に「かわいいかくれんぼ」で喜直と組んで大いに気に入り、童謡作詞の依頼の度に作曲には喜直を指名、この2人の作品は200曲以上にのぼります。このコンビによる名曲「ちいさい秋みつけた」は1955年にNHKラジオで1度放送されただけでしたが、それを聴いた1人の人物の情熱がこの曲の命運を分けました。その人物の名は長田暁二。当時キングレコードのディレクターだった彼はこの歌を聴いて衝撃を受け「背筋に電流が走ったようだった」といいます。当然、長田はレコード化したと考えますが、当時サトウハチローはライバル会社コロムビアの専属作家。キングからサトウの作品を発売できるはずがありません。機をうかがうこと7年、1962年にサトウがフリーにな

るタイミングで念願のレコード化が叶います。ポニージャックスが歌ったこのレコードはその年の日本レコード大賞童謡賞を受賞。「人を出会わせ、結びつけ、幸せにした歌」と長田が振り返るように、この曲でサトウ&中田のコンビは高く評価され、ポニージャックスはこれをきっかけに童謡のレパートリーを広げることとなりました。

冬の名曲「雪の降るまちを」は、昭和中期のラジオ放送を取り巻く環境から偶発的に生み出された歌でした。1951年、喜直はNHKのラジオドラマ「えり子とともに」の音楽担当として、挿入曲を作曲していました。当時のラジオドラマは生放送。ある放送前のリハーサルで、台本が短くて放送に空白ができてしまうということが分かります。その空白を埋めるために歌を流すこととなり、台本を担当した劇作家の内村直也は急いで詞を書き上げました。喜直も大至急曲を付けますが、その時のことを後に「詞を読んでさっと作りました。イメージをふくらませ、言葉のリズムを大切にメロディーを考える。ぼくの場合、歌作りはいつもこんな感じなんですよ」と事もなげに語っています。しかしこの曲は急ごしらえとは思えないほど心を打つもので、放送後大きな反響を呼びました。NHKは歌謡番組での放送を決め、1番しかなかった歌詞に2,3番を加えて独立した曲として発表されたのでした。

このように季節の歌を数多く作曲した中田喜直。この中に春の歌がないのは偶然でしょうか。自身のエッセイで「春の歌をいろいろ作ったのだが、どうもヒットしない」「『早春譜』という歌が今でもよく歌われているが、これは私の父(中田章)の作曲した唯一知られている歌曲で、あとは何もない」「それが春の歌であるから、私はなるべく邪魔をしないで、敬意を表するこ

とにした。などと言って、講演の時に聴衆を笑わせることがある」と記しています。深い優しさとおおらかなユーモア——喜直のそんな人柄は作品からもにじみ出ているように感じられます。

1979年、亡きサトウハチローの後を継ぎ日本童謡協会の第2代会長に就任、1986年からは全国童謡歌唱コンクールを開催し、子どもから大人まで、全ての人の心のよりどころとなる童謡の普及に尽力した喜直。2000年に76歳で惜しまれつつ他界しましたが、その“うた”の数々はいまでも私たちの心の中に生き続け、これからもずっと歌い継がれていくことでしょう。

9月の演奏会では、日本歌曲演奏・解釈の第一人者であり、当館でも畑中元総監督とともに日本歌曲の企画に携わってきた塚田佳男さんを曲目構成・お話・ピアノで迎え、日本歌曲のスペシャリストたちの演奏をお届けします。生誕100年の記念にふさわしい演奏家たちによる、心に響く中田喜直の“うた”の世界をじっくりとご堪能ください。

●参考資料

上田信道「名作童謡ふしぎ物語」(創元社・2005年)
長田暁二「心の中の日本の歌101選」(ヤマハミュージックメディア・2007年)
読売新聞文化部「唱歌・童謡のものがたり」(岩波書店・1999年)
中田喜直「随筆集 音楽と人生」(音楽之友社・1994年)

■公演情報

中田喜直の“うた”の世界 ～生誕100年に寄せて～

2023.9.18(月・祝) 14:00

出演:塚田佳男(曲目構成・お話・ピアノ)、
小泉恵子(ソプラノ)、田坂蘭子(ソプラノ)、
布施雅也(テノール)、清水良一(バリトン)、
田中悠一郎(ピアノ)

全席指定 一般¥3,000、
U-25(25歳以下)¥1,000

●曲目

《“マチネ・ポエティック”による四つの歌曲》
ちいさい秋みつけた、めだかの学校、
夏の思い出、夜店の唄、歌をください ほか

コンサートに寄せて

～ショーソン〈協奏曲〉の魅力

庄司紗矢香



く機会を得ました。私はこの〈協奏曲〉の陰影に富んだパレット、時には何処までも陰鬱で、時には薄灯に照らされて浮かび上がる光の反射、詩とメランコリーに魅力を感じています。

またショーソンは元々作家志望で、画才もあり、色々迷った結果、最終的に作曲家となりました。彼の所有していた美術コレクションには仏印象派の画家は勿論の事、歌麿、春信、写楽などの浮世絵作家の名があり、ジャポニズムの影響の最中に生きていた事も窺い知れます。話はそれますが、パリの北にあるモネの家は庭の池も素晴らしいですが、家の中の浮世絵の数には圧倒されます。壁という壁に浮世絵が飾ってあるのです。フランスにおける日本と日本文化への憧れは、今日においても根強く受け継がれています。

私はフランスを拠点にして20年近くになります。実際に住んでみてはじめてフランスにおけるジャポニズムの影響が、教科書で学んで想像していた以上に大きく、現在においても深く根付いていることを肌で感じる事ができました。

今回、フランスを代表するカルテットであるモディリアーニ弦楽四重奏団と来日するにあたっては、やはりフランスのレパートリーを主に、そして日本人としてフランス音楽の影響を強く受けている武満の作品を含むこととしました。

プログラムのメインとなるショーソンについてですが、ショーソンのヴァイオリン曲では主に〈詩曲〉が弾かれることが多いかと思います。私も〈詩曲〉には10代の頃から親しんできました。

今回取り上げるヴァイオリン、ピアノ

と弦楽四重奏のための〈協奏曲〉の存在を知ったのはパリに移った頃。20代のはじめで、そのドラマチックな構想と色彩感に触発されて、ずっと弾く機会を探してきました。実際に初めて演奏したのは2016年ごろロックンハウス音楽祭で、その後モディリアーニ弦楽四重奏団と南仏の音楽祭で弾

フランスの様々な音楽祭でご一緒してきたモディリアーニ四重奏団、そして素晴らしいピアニストであるベンジャミン・グローヴナーさんと、今回私の日本の大切な拠点の一つである水戸で共演できることをとても嬉しく思っています。



フランス近代の室内楽をたどる旅

文：関根哲也

コンサートで演奏される曲の作曲年を見てみましょう。

武満徹：妖精の距離 1951年

ドビュッシー：Vnソナタ 1916～17年

ラヴェル：弦楽四重奏曲 1902～03年

ショーソン：協奏曲 1891年

19世紀末に書かれたショーソンの〈協奏曲〉に向かって、時代をさかのぼっていくプログラムになっています。ドビュッシーの影響の色濃い武満作品も含め、さながらフランス近代の室内楽創作を辿る旅のような魅力的なプログラムです。

エルネスト・ショーソン（1855～1899）は、庄司紗矢香さんも左ページのコメントで述べている通り、やはり〈詩曲〉で知られる作曲家と言えるでしょう。裕福な家庭に生まれ、自身も上流階級の女性と結婚し、複数の別荘を持ち、見事な美術品の数々を所有していました。ショーソンが主宰するサロンに出入りしていた若きドビュッシーをはじめ、芸術家たちの支援にも力を尽くしたため、自らの作曲の時間が取れなかったと伝えられるほど、彼の交友関係は多彩でした。作曲家だけでもドビュッシーのほか、フランク、フォーレ、ダンディ、サティ、アルベニスらがショーソンのもとに集い、その他マラルメ、ヴァレリー、ジッドといった文学者、マネ、ルノワール、ドガ、ルドンといった美術家も彼のサロンに出入りしていました。

そのショーソンが30代半ばにしてじっくりと取り組んだ作品がヴァイオリン、ピアノと弦楽四重奏のための

〈協奏曲〉です。4楽章から成り、演奏に40分ほどを要する大作で、ヴァイオリンとピアノがソロ、弦楽四重奏が伴奏という協奏曲の性格と、ヴァイオリン、ピアノ、弦楽四重奏による六重奏という室内楽の性格の両面を備えています。初演は大成功を博しました。その後、ヴァイオリンと管弦楽のための〈詩曲〉や交響詩〈祭りの夕べ〉などを完成させ、さらに室内楽のジャンルの頂である〈弦楽四重奏曲〉の作曲へと挑みます。しかし、44歳の時、自転車事故で突然この世を去り、〈弦楽四重奏曲〉は未完のまま残されることとなりました。

フランス国内の状況に目を転ずると、同じ頃、〈弦楽四重奏曲〉の創作はドビュッシーとラヴェルという新しい世代の台頭により、著しく“進化”します。クロード・ドビュッシー（1862～1918）の耳慣れぬ音響と実験に満ちた〈弦楽四重奏曲〉の発表から約10年後、モーリス・ラヴェル（1875～1937）も〈弦楽四重奏曲〉を世に問いました。ドビュッシーとはまた違ったやり方で旋法を用い、近代的音響とメランコリックな抒情とをあわせ持つこの作品の評判は上々で、ドビュッシーも「音楽の神と私の名において、君の四重奏曲の一音符たりとも変更してはなりません」と伝えています。（ただ、ラヴェル自身は仕上がりに満足しておらず、後年改訂を施したのですが。）

フランス近代を代表するドビュッシーとラヴェルですが、二人とも室内楽曲はあまり多く残さず、やや散発的に書いている印象があります。しかし、唯一の例外と言えるのがドビュッシーの晩年です。“さまざまな楽器のための6つのソナタ”が構想され、〈チェロと

ピアノのためのソナタ〉、〈フルート、ヴィオラとハーブのためのソナタ〉、〈ヴァイオリンとピアノのためのソナタ〉の3曲が作曲されました。その後、病に倒れたため、〈ヴァイオリン・ソナタ〉がドビュッシーの“白鳥の歌”となってしまいましたが、晩年のドビュッシーの複雑な音楽的想念がこの作品には深く刻まれていると言えそうです。

時は流れ、第2次世界大戦後、ドビュッシーから多大な影響を受けて作曲活動を開始するのが武満徹（1930～1996）です。ヴァイオリンとピアノのための〈妖精の距離〉は、まだ20歳の武満が、シュルレアリスムの代表的芸術家・瀧口修造の同名の詩に想を得て作曲した作品。ドビュッシー的な響きのグラデーションの中に、若き武満の鋭利な感性が息づいています。

このような魅力的なプログラムを、庄司紗矢香さんほか世界一流のアーティストの演奏で聴ける機会は滅多にありません。どうぞお聴き逃がしなく。

■公演情報

**庄司紗矢香(ヴァイオリン)、
ベンジャミン・グローヴナー
(ピアノ)、
モディリアーニ弦楽四重奏団**

2023.9.23(土・祝) 15:00
全席指定 一般¥7,000、
U-25(25歳以下) ¥2,000

●曲目

武満徹：妖精の距離—ヴァイオリンとピアノのための
ドビュッシー：ヴァイオリン・ソナタ
ラヴェル：弦楽四重奏曲へ長調
ショーソン：ヴァイオリン、ピアノと弦楽四重奏のための協奏曲 二長調 作品21

INFORMATION

※以下は7月6日現在の情報です。公演等に関する最新情報は当館ウェブサイトにてご確認ください。

チケット・インフォメーション

〈8.26(土)発売分〉

■茨城の名手・名歌手たち 第31回

10.29(日) 16:00

■パボラーク・アンサンブルwith吉野直子

11.26(日) 15:00

■クリスチャン・ツィメルマン ピアノ・リサイタル

12.6(水) 19:00

〈9.23(土)発売分〉

■クリスマス・プレゼント・コンサート2023

12.23(土) 16:00

■ちょっとお昼にクラシック 高橋敦(Tp)&呉信一(Tb)& 竹島悟史(Perc)

2024.1.26(金) 13:30

Lucky FM 茨城放送

「水戸芸術館 presents みんなのクラシック」

毎週日曜 7:30~8:00

パーソナリティ:石井哲也アナウンサー

出演:音楽部門学芸員(月替わり)

学芸員がおすすめの曲をご紹介します。クラシックの魅力をお届けする番組です。

▼Lucky FM ウェブサイト

<https://lucky-ibaraki.com/>

▼radiko(ラジオ)でもお聴

きいただけます

<https://radiko.jp/>



好評
放送中!

8・9月の主な音楽イベント

コンサートホールATM

◆水戸芸術館 新・専属楽団 カルテットAT水戸 第1回演奏会

8.6(日) 14:00

料金[全席指定]一般¥4,500/U-25(25歳以下)¥1,500

◆0歳からのわくわくオルガン・コンサート もり★オルガン

8.11(金・祝) 11:00

料金[全席指定]子ども(0歳~小学生)¥500/一般(中学生以上)¥1,000

◆Ensemble cinq couleurs 木管五重奏で味わう音楽劇と隠れた名曲たち

8.20(日) 14:00 料金[全席自由]¥1,000

◆水戸市民会館開館記念事業・水戸芸術館連携事業

サイトウ・キネン・オーケストラ プラス・アンサンブル

2023セイジ・オザワ 松本フェスティバル 特別公演

会場:水戸市民会館グロースホール(大ホール)

8.30(水) 19:00

料金[全席指定]A席¥4,000/B席¥3,000/U-25(25歳以下)¥1,000

◆中田喜直の「うた」の世界へ生誕100年に寄せて〜

曲目構成・お話・ピアノ:塚田佳男

9.18(月・祝) 14:00

料金[全席指定]一般¥3,000/U-25(25歳以下)¥1,000

◆庄司紗矢香(ヴァイオリン)&ベンジャミン・グローヴナー(ピアノ)

&モディリアーニ弦楽四重奏団

9.23(土・祝) 15:00

料金[全席指定]一般¥7,000/U-25(25歳以下)¥2,000

エントランスホール

◆ピーオプロジェクト「平和作文朗読発表会とオルガン・コンサート」

8.12(土) 13:30~14:15 高橋博子、重松希巳江(クラリネット)

◆パイプオルガン・プロムナード・コンサート(入場無料/事前予約不要)

□8.27(日) 12:00~12:30 山司恵莉子

□9.3(日) 12:00~12:30/13:30~14:00 栗山美緒

□9.9(土) 12:00~12:30/13:30~14:00 甲斐弦也

2023年7月11日発行(第257号)

編集:水戸芸術館音楽部門 | 中村晃、関根哲也、高巢真樹、篠田大基、鴻巣俊博、高木春佳、木村綾花

発行:(公財)水戸市芸術振興財団 〒310-0063 茨城県水戸市五軒町1-6-8 Tel.029-227-8118(音楽部門)

Tel.029-231-8000(チケット予約センター 9:30~18:00/月曜休館) <https://www.arttowermito.or.jp/>

デザイン:K5 ART DESIGN OFFICE. 印刷製本:山三印刷株式会社

■編集後記

蚊の季節になりました。蚊に刺されやすく、大勢の中にもなぜか集中攻撃される私。早速虫除けスプレーを買いに行くと、大きくてリアルなトンボ型のプローチ(虫除け)が…。これをつけたら蚊より人にびっくられそうです。(綾)

夏が来れば思い出す…毎年この時期になると、担当させていただいている12月の「クリスマス・プレゼント・コンサート」の準備が本格的に始まります。昔から真夏にクリスマスソングを聴くのが好きな私には合っているかも。(浦)

スペインのサント・ドミンゴ・デ・シロス修道院聖歌隊が歌うグレゴリオ聖歌のミュージックセットを手に入れて、聴いています。グレゴリオ聖歌が癒しの音楽として流行した今から丁度30年前のテープ。予想以上に良い音質でした。(篠)

演劇・美術のイチオシ企画!

ACM劇場

◆ミュージカル「カラフル」

8.19(土) 18:00~、20(日) 14:00~

料金[全席指定]

S席一般¥8,500/U-25(25歳以下)¥6,500

A席一般¥6,500/U-25(25歳以下)¥4,500

原作:森絵都「カラフル」(文春文庫刊)

脚本・作詞・演出:小林香

作曲・編曲:大崎慶子

出演:鈴木福、川平慈英ほか



現代美術ギャラリー

◆市民会館開館記念事業 アートセンターをひらく 2023—地域をあそぶ

7.22(土)~10.9(月・祝)

[休館日]月曜日(祝日の場合は翌火曜日)

[開場時間]10:00~18:00(入場は

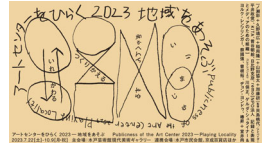
17:30まで)

※水戸市民会館・京成百貨店と連携。各施設の開館時間に準じる。

[入場料]一般¥900/団体(20名以上)

¥700 ※大学生以下/70歳以上、障害者手帳などをお持ちの方と付き添いの方

1名は無料



グラフィックデザイン:長崎りかこ(village®)+川久保美桜(village®)

★《第九》コーラス参加者募集!

水戸芸術館では12月に開催する「水戸の街に響け!300人の《第九》」のコーラス参加者を募集いたします。詳しくは、当館ウェブサイトから応募要項をご覧ください。

[公演日]2023年12月17日(日)[演奏曲]ベートーヴェン:交響曲第9番/4楽章

[応募資格]10月~12月に水戸芸術館で行う練習に参加できる方(経験不問)

[参加料]2,000円 [応募締切]8月31日(木)

[お問合せ]水戸芸術館音楽部門(第九)係

★新聞にて音楽部門学芸員によるコラムを連載中!

○茨城新聞「ATM便り」毎月1回(不定期)

○東京新聞「水戸芸術館発 クラシックへの旅」毎月第3日曜



金管楽器奏者は
お酒好きが多いらしいよ。
高貴なる葡萄酒に乾杯!



演出家の栗山昌良先生がご逝去された。学生時代、藤沢市民オペラに出演させていただいたとき衝撃の“栗山体験”をし、水戸芸術館では市民オペラ等の現場で再び張り詰める緊張感の中でご一緒させていただいた。心よりご冥福をお祈りします。(て)

実家に2,3週間1回ほど顔を出すのですが、愛猫が私のことを忘れてみたいで、あんなに仲良しだったのにすごい逃げまくりです(笑)元々読者でしたが、会う期間が空いてさらに読者になりました。これはお菓子で釣れない!!(春)

とある日曜の朝。早起きしたので何気なくラジオをつけると、なんと味わい深い番組を発見。「朝の小鳥」という、野鳥の声をお届けして70年(!!)というご長寿番組でした。ほんの5分間、森林の中にいる気分を味わいました。(樹)

7月に新しい水戸市民会館が開館し、8月には芸術館の新専属楽団「カルテットAT水戸」が始動する。新しい出発が重なる今夏。革新性こそが芸術創造の源泉であり、新しい価値の創出のためにも、チャレンジ精神を持ち続けたい。(中)